

東京都が設置した「患者の声相談窓口」には年間約1万件の相談が届くが、うち1割が医療行為や医師とのコミュニケーションを巡る苦情だという。ドクターハラズメント、通称「ドクハラ」が叫ばれて久しい昨今、その極致ともいえる事件が鹿児島県の精神科クリニックで起きていた。薬の過剰投与と一言で女性患者の心身をもてあそばした医師は、複数の自殺者を出してなお、今日も平然と営業を続けている。クリニックで行われていた悪夢の診療を、被害者遺族が本誌だけに語ってくれた――

カーテンで区切られた診察室の中で、1人の男性医師がうつむきながら話している。「確かに、関係があったのはその通りです」

――性交渉があったと。  
「回数はいくつですか」

――回数はいくつですか  
「回数はいくつですか」

を問い詰めているのは、この医師との関係の後、自ら命を絶った女性患者の遺族である。  
\*  
6月8日、九州厚生局麻薬取締部が鹿児島県内に住む精神科医X氏（44才）の自宅と、彼が経営する2診療所（鹿児島市と垂水市）を家宅捜索した。X氏には、無診察の患者に営利目的で向精神薬を処方した疑いが持たれていた。「すんなり診療体制が常態化していた」

「患者と主治医の関係を完全に逸脱してしまいました。彼女への好意を抑えられなかった。ただ、患者とそういう関係になったのは彼女だけでした」

――恋愛感情があったと。  
「はい。でも、性の道具に使ったような、そんなつもりはないです。申し訳ないことをしてしまいました……」

がっかりとやなだれる男性

### 精神科医異例の捜査

同業者、あり得ない

向精神薬不正疑い鹿児島県医師会  
2診療所を家宅捜索  
鹿児島市の医師聴取  
鹿児島市の医師聴取

向精神薬不正疑い鹿児島県医師会  
10人超、診療所内

向精神薬不正疑い鹿児島県医師会  
2診療所を家宅捜索  
鹿児島市の医師聴取  
鹿児島市の医師聴取

いんです。X氏は患者に対し、鬼畜の所業、を行っていた。そう話すのは鹿児島市在住の岡田聡子さん（55才、仮名）。14年3月から同クリニックにかかっていた娘の綾子さん（仮名）が、同年12月に自殺したのだという。まだ27才という若すぎる死だった。岡田さんは声を震わせながら、事の経緯を語ってくれた。「娘は福岡で働いていたのですが、体調を崩して実家に戻っていました。精神的に苦しむことがいろいろあり、X氏の診療所に行ったんです。私も立ち会いましたが、最初から彼の態度には疑問でした。一通り、娘の現状を説明したところ、このままだとどうせ仕事に行けなくなるよ、とうすら笑いを浮かべていた。処方箋に関しては、薬を出しておきますね、のひとことで終わりました」



医療ジャーナリスト 伊藤隼也と本誌取材班

本誌がX氏を撮影すると、しどろもどろに……

### 鹿児島発

# セクハラ医師

極めて強い睡眠薬である。

そもそも向精神薬には副作用が付きもので、薬によって「アクチペーション・シンドROME（自殺企図や他人への攻撃性などの異常行動）」が引き起こされることは、製薬会社も認めている。

事実、向精神薬の1つ「バキシル」の添付文書には、「使用上の注意 慎重投与（次の患者には慎重に投与すること）」として、次の文章が

「被害者遺族 怒りの告白」

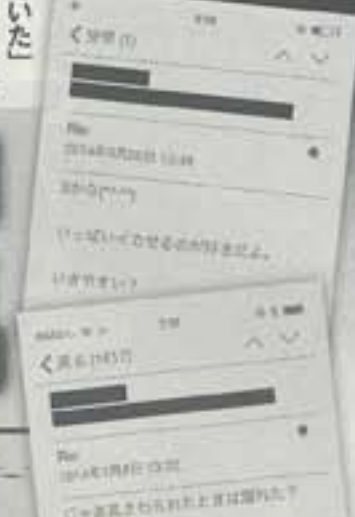
明記されている。  
（躁うつ病患者躁転、自殺企図があらわれることがある。）  
体の震えが止まらず、錯乱状態に陥ることも多々あったという綾子さんは、症状の改善が見られることもないまま、12月6日午前6時、自宅のトイレのドアノブにストールをかけて自殺した。

多数出てきて……。彼が娘に送った文面を読んで、がく然としました。患者と医師の関係を完全に逸脱していたんです」（岡田さん）  
以下、X氏から来たメールの一部である。  
（とりあえず綾子ちゃんにはエロい？ エッチは好き？）  
（縛られたり道具使われたりも好き？）  
（今日は奴隷プレイだから）  
（ご褒美やるよ。チンコでいい？）

# 鬼畜の診察室

# 麻薬取締部が捜査!

その後、自ら命を絶った患者も 過剰な薬を投与して肉関係。



セクハラ医師X氏の非道な投与する向精神薬の処方箋（X氏はX氏から娘に届けた）

度が増えていたのですが、X氏に伝えても、それは治療が進んでいることなので安心してください、と繰り返すのみでした」（岡田さん）  
以来、綾子さんの心身は不調を極め、仕事にも行けなくなっていました。

診療を重ねることに処方される薬が増え、彼女の症状は悪化の一途をたどった。

14年4月にはリストカットが始まり、日常生活もままならなくなる。この時、X氏は「生活保護を受ければ良い」と意に介さなかったという。

7月には処方される薬が10種になっていました。とても強い薬が多く、服用して一時的に症状がよくなり、薬の効果が切れては沈み込む、ということを繰り返す状態でした」（岡田さん）

処方された薬の1つが「ベグタミン」だ。不整脈や悪性症状などの重篤な副作用から16年9月に製造が中止された。

### クリニックの従業員も自殺していた

冒頭のやりとりは、綾子さんの死から1か月あまり、四十九日を控えた岡田さんが、家族と共に病院を訪れた時のものである。

「X氏は、何を言っても下を向いて黙っているばかりで……。でも、最終的には娘との関係をすべて認めました。治療には全力を尽くしていたと主張し、患者と関係を結んだのは彼女が初めてだった」と言っていました」（岡田さん）

だが、彼の言葉はすべて嘘だった。

本誌が取材を進めると、他にも多数の女性患者が、同様の被害にあっていたことが判明したのだ。

以下、患者たちの声を紹介する。

「日々の症状を把握したいから、とLINEを交換してからは、毎日200通近いメッセージが届くようになってきました。僕を男として見れますか？ とか、男女関係を求めてくるものばかりでした。」

一度関係を断ったからには、「君だけを愛している」というLINEが毎日のように来ました。他の女性にも同じことをしているなんて、まったく知らなかった」





精神科医のわいせつ事件が多発している。  
(写真はイメージ)

「従業員の中にもX氏の毒牙にかかったかたはいます。昨年8月、あのクリニックで精神保健福祉士として働いていた女性が自殺しているんです。Cさんが明かす。」

「処方薬が大量で、依存症気味になり、精神的にもより不安定になっていきました。その過程で、半ば無理矢理肉体的関係を持たされてしまつて……。以降は、そういう下着を着ろ」とか、パイプを入れたまま診察室に來い」とか、変態的な要求ばかりになりました」

「診察中に体を触られることは日常茶飯事。X氏は通販でアダルトグッズをたくさん購入して、往診時の中は手錠やパイプなどで埋め尽くされていました」

みなX氏との肉体的関係を認めた上で、おぞましい手口を明かしてくれました。

また、X氏が手を出した女性性は患者だけではなかった。クリニックの元従業員であるCさんが明かす。

## 「パイプパイプ」なクリニック

彼女とX氏の関係は院内でも公然の秘密で、最後は精神的に病んでしまい、X氏から薬を処方されている状況でした。あまりに痛ましい事件だったにもかかわらず、当のX氏は「バカだなあ。つて言うだけ。普通に営業を続けていました」

Cさんによれば、クリニックの業務体系にも問題が多数あったという。

「毎朝病院に來ると、その日診察予定の患者名簿を確認するので、男性患者の欄は全員ハツ印を入れて、診察せず薬を処方するだけなんです。X氏自身も向精神薬を服用しており、診察を放棄してベッドで眠りこけることもしょっちゅう。」

薬物依存にして患者の正常な判断を奪おうとしていたのか、過剰な薬の処方も日常で体調がより悪化して、いく患者も多かった。カルテに書かれる病名がどんどん増えて行くんです。この診療所は危ない、というのには従業員の間で、1年で20人以上が辞めていく異常事態が続いていました（Cさん）

本誌が入手したある女性患者のカルテにも、うつ病、不眠症、慢性胃炎、円形脱毛症、虚血性心疾患、肝機能障害とさまざまな病名が書かれていた。この患者に話を聞くと、「最初はうつ気味だから診察を受けたのですが病状はよくなるどころか悪化するばかり。それに伴い、処方される薬の量も増えていく一方でした」と証言してくれた。

人の心を扱うという仕事柄「患者のちよつとしたマインドコントロールなら簡単」と豪語する医師さへいる。

悪質な精神科医を生む最大の要因は、「患者を作れる可能性」にある。

内科や外科と違い、精神科の診療には血液検査もレントゲンもMRIもない。

ストレスでつらい、心がモヤモヤするといった人が来院した際、「うつ病」と診断するだけで、その人は精神病患者となる。

しかし前述の通り、向精神薬には自傷他害等の副作用があり、治療効果に関してもエビデンスが充分でない。実際、12年に日本うつ病学会が「軽度のうつ病には薬を優先しない」という新ガイドラインを発表している。

鹿児島市の事例は、この精神科医療の病巣が顕著に表れたケースである。

岡田さんは現在、「精神科医の立場を悪用した不適切な行為で症状が悪化した」として、他の被害女性らと共にX氏に対して損害賠償請求を求める提訴を検討している。

元患者の相談を受ける早川雅子弁護士が語る。

「少なくとも12名の女性が同様の被害を受けていることを把握しており、県警にも相談しています。不安定な患者の弱みにつけ込むような行為で、医師の責任は重大です」

厚生局の麻薬取締部は、自宅捜索時の押取物を基に捜査を進めているが、現時点でX氏はなんの処罰も受けておらず、クリニックも営業を続けている。

7月下旬の昼下がりに、本誌は自宅から出てきたX氏を直撃した。

「無診察での薬の処方と、複数の女性へのセクハラ行為についてお話をうかがいたい」「あの、いや、あの……」

「被害者女性の中には自殺したかたもいます。」

「いやあ……」

「罪の意識はないのですか。」

「……」

「そこまで問いかけると、無言のまま足早に自宅へと戻って行った。X氏の弁護士に取材を申し込むと、

「本人が、取材には応じられない。とのことです」とコメントした。

新たな被害者が出ないことを祈るばかりである。



X氏が女性患者に強要した下着、パイプを縫い込んで入っていたという。